

20/6/15 共謀罪廃止を求めるオンライントーク

(全国市民オンブズマン連絡会議による、半自動文字起こしアプリによる文字起こし)

瀬藤： 本日は6.15 共謀罪廃止を求めるオンライントークをご視聴いただきありがとうございます。ございます。

本日のこのイベントは共謀罪の強行採決から3年という節目の年に企画したものです。主催者は共謀罪廃止のための連絡会、共謀罪の実行委員会、秘密保護法を廃止への実行委員会の3者です。

私は共謀罪廃止するための連絡会も構成団体の一つ、日本消費者連盟の瀬藤美千世といいます。今日は司会を務めます。よろしくお願い致します。

最初に私たちの活動を簡単に紹介させていただきたいと思います。

私達は共謀罪が強行採決されてからすぐに動き出し、やっぱりこんな悪法は早く廃止しなくてはいけないということで市民団体、人権団体そして弁護士の皆さん、いろんな市民団体と一緒に共謀罪廃止のための連絡会を結成しました。そして強行採決から3ヶ月目の9月15日、2017年の9月15日に日比谷野音でこんな共謀罪は早く廃止しなければいけないという大集会を開催しました。そのときはもう法律が制定、法律が採決されてしまったんですけども3000人の人たちが集まり、とても大きな盛り上がりを感じたのを覚えております。そしてその後も私達は諦めることなく様々な取り組みをしてきました。

例えば共謀罪廃止法案を出してもらおうということで衆議院参議院の国会議員の方たちに働きかけました。そしてその結果もありまして、衆議院では共謀罪廃止法案を提出していただくことができました。

そして今年は国連自由権規約協会への働きかけというNGOの働きかけもしようと思って今活動を開始しているところです。

本日の6.15 共謀罪廃止を求めるオンライントークにはジャーナリストの青木理さん、そして私達と一緒に常に活動していただいている弁護士の海渡雄一さんに来ていただきまして、お二人でこれから1時間強の対談をしていただくこととなります。

そしてこの今回の企画に関しましては皆さんご視聴いただいておりますけれども、チャットの機能がございまして、そちらで随時質問を受け付けておりますので、ぜひたくさん質問をお寄せいただければと思います。

ではここからは海渡さんにバトンタッチして、対談を始めていただきたいと思います。よろしくお願いします。

海渡： 共謀罪の廃止運動をずっと続けてきました弁護士の海渡と申します。

今日は共謀罪が国会で成立してちょうど3年目の日なんです。

突然なんか委員会省略して本会議っていうなんかすごい国会だった。あの時はまだ国会の周りにたくさんの方が集まられてですね一部反対の声を叫んだりしましたけれども、もうあれから3年経ったのかっていうんですけれども。

今日は青木さんにお忙しい中おいでいただいて、時々弁護士会のあの集会なんかでもお目にかかりますね。あのこのテーマでも何度かお話をさせていただいたことがありますけれども、今日のご足労いただきましてありがとうございます。

青木： こちらこそよろしくお願ひします。

海渡： どうぞよろしくお願ひいたします。意味がある。中身のある対談になるように一生懸命僕は聞き役でお話聞きたいと思いますが。

あの、まず最初に映画の「新聞記者」、これはですね、日本の映画の賞一なんかも取ったりして僕はシム・ウンギョンさんって人がすごくいい女優さんだなと思ったんですけどもちゃんとアカデミー賞をとったりですね、そういうことになって、それもすごく嬉しかったんですけども松坂桃李ちゃんが出てくれたおかげでかなり若い人も観てですね、ちょっと日本の政治の仕組みというか、政権の中枢があんなことになってるんだらうかっていう、驚きでもって迎えられた映画だったんだと思うんですけども、青木さん、実際に官邸内部ってあんなもんなんでしょうかね。誰も見た人いないんですけど。

青木： いや、最初にお断りしないといけないのが、多分今日話題になる治安機関っていう警察の公安部門を中心とした共謀罪がもし全力で使われるんだとすれば、おそらくその主役になるだらう警察の治安部門というのが、僕がいわゆる記者クラブ悪名高き記者クラブにいて取材したのが、もう10年じゃきかない20年じゃきかない25年位前なんですね。

海渡： 「公安警察」というのは古典的名著ですね。

青木： あれを書いたのが、名著かどうか別としてあれを書いたのが1999年。僕が警察の担当してたのが、ちょうどオウム真理教事件があった頃なので、94年、5年6年ぐらいなんですね。7年8年9年くらいまで僕はその通信社の記者として警察、公安関係を取材をして、日本の公安警察ってのを書いて基本的に僕は取材者から追われる側に変ったというか、中に入り込んできちんと取材をするってことは僕はそれ以来ずっとしてないので。

海渡： できなくなっちゃったというわけですね。

青木： そういうことですので、今現在治安機関がどうなのか官邸って新聞記者で描かれた官邸内部がああなのかどうなのかっていうのは僕は政治記者でもないんで、正直言うと僕は知らないんですね。特にあの時期からの一番大きな変化っていうのは新聞記者の中でも描かれてましたけれど。いわゆるデジタルデバイスの発達で、僕が公安担当してた頃は携帯電

話がようやく出始めた位でしたから、99年に例の通信傍受法、いわゆる盗聴法が出来たりとかして、その気配はあったんですけども、基本的にそのデジタルデバイスってものを治安機関がどう使ってるかっていうのは全然わからない。

海渡： 一番知りたいところですよわね、誰も知らないですから。青木だけでなくて。

青木： そうです。だからまああの時代とまで言ったら多分それこそ縄文時代と近現代ぐらいの多分きつとね。の違いがあると思うんですね。ただ治安機関の本質みたいなものはおそらく変わらないのでその辺の話は今日しようと思うんですが。そのご質問に戻れば、あの「新聞記者」っていうものが描かれた官邸の図ってというのはどうなのかなってというのは、僕はわからないんですが、ただちょっと気をつけて観なくちゃいけなあって思うのは僕は正直言うとまたプロデューサーの河村さんだったかなあ、時前に僕のところにいらっしゃって、治安機関というものはどういう活動してるのかっていう話をその聞かせてくれって言うんで、かなり1、2時間3時間ぐらいお話ししたんですよ。ていう僕の感覚で言うと、あんまり治安機関とか情報機関とかっていうのを観るときに謀略チックに見るのはよくないのかなと僕は大前提としてはちょっと申し上げておかないと、だからさすがにあれ映画なんで別にそのデフォルメして描くのはいいんですけど、いくらなんでも官邸の中であんなに暗い部屋でカチャカチャと何かこうツイッターとかに打ってるっていうことは僕はないと思いたいですけど、どうなんですか。

海渡： いや分からないですね。

青木： さすがにあれはないと思うんですけども、たださっき申し上げたようなデジタルデバイスが出てきて情報収集っていうもののありようというのがものすごく大きく変わったろうし、それをどういうふうに活用しているのかっていうのは一つの焦点ではありますよね。あのスノーデン氏が言ったみたいに、どうも治安機関にね、後で話すと思いますが、

海渡： Xkeyスコアですよ。スパイのGoogleって、ああいうものが本当にあるってことはほぼ確実に日本にもアプリを渡したっていうふうに海外の報道機関なんか言ってるわけで

青木： どうも使ってるんですね。使ってるのは、これはどうも防衛省じゃないかということらしいんですよ、いろんな人たちに聞くと。これも後で話すと思うんですけど、防衛省の中にその電波部っていう組織があるんですけども、この電波部ってのは昔から有名なのは大韓航空機を撃墜した事件を世界で一番早く察知っていか、確認をした日本の防衛省当

時の防衛庁のいわゆる情報組織なんですけど北海道からその鹿児島沖縄九州までいろんな電波を傍受する組織、基地を置いていて、いわゆる旧共産圏の無線電波ですよ。シギントとですよ、傍受していてさっきの大韓航空機をソ連機が撃墜した事件ってのは、そのソ連の無線を傍受していてそれを電波部がいち早くキャッチをしてアメリカよりも早く知っていたと日本の防衛庁の電波部がその情報をアメリカに提供して、ところがいろんな笑い話があって今日多分その話も本質的な話だと思うんですけど、当時の後藤田さんが官房長官だったんですかね後藤田さんというのは後藤田正晴さんというのはご存知の通り、戦前のね内務省に入って戦後は警察庁で警察官僚で最後は警察庁長官までにもなった人ですよ。晩年は何か本当、ハト派みたいな扱いでしたけど、まあある種警察官僚のドンみたいな人で彼がいろんな逸話を残していて、怒り狂ったらしいんですよ。電波部がソ連機の撃墜っていうのをキャッチしたのに、政権に上がってくるよりも先にアメリカ軍に行ってたんですよ、それでその情報が。お前らどこの国の自衛隊なんだという話があってだからアメリカの情報機関等にほんのをいわゆる治安機関情報機関というものがほぼ直結していて、ときには日本の政権すらすっ飛ばして出してしまうというようなことがあるっていうのは、ひょっとするとその電波部ってのが、実はそのXkeyスコアを使っているのではないかという話をちょっと聞いたことあるんですけどね。

海渡： なるほど。僕、実際に起きたことで、かなり官邸の情報収集が問題になった事件としては特筆すべきなのは前川喜平さんの件じゃないかと思うんですね。

前川さんが加計の問題です。きちんと話をしようとする直前に呼ばれて、そしてその発言するんだったら、その君が新宿の出会い系のバーに通っていることを話すよっていうふうにおそらく和泉さんですよ。言われたというそれをネタになってる情報っていうのは誰が考えても公安情報だと思うんです。そしてそれを本当に断ったらそのことが、読売新聞の一面に出ちゃったん訳ですよ。これはやっぱり国家権力側にとって不都合なことを話す人間はこういう握っている情報を持って抹殺してしまうっていうなんかこう、プロセスが現実に行われてるんだらうなど。あの前川さんは実は奇跡的に救われたって言うか、その直後の週刊文春でね実際に通ってたバーの女の子とそのお母さんが、あの前川さんはちっとも嫌らしいとはしませんでしたみたいなことを言ってくれたんで、そういう亡き者にされるみたいなそういう無力化されることはなかったんだけど、でも本当にあの瞬間に、みんなもうこの人は駄目かなと思いましたよね。

青木： 前川さんに関して言うと、だから僕はあのときに前川さんの動きがあるんだみたいな話をしたときに読売新聞にね、今海渡さんがご指摘された記事が出たときに僕も終わりだと思いましたよね。僕はもともと不埒な人間なのであの出会い系バーに行っても何事もなかったということはないだろうと、これ僕らのメディア仕事の基本なのでその話をちょっとしておく、大事なのは告発の中身ってあってね、その告発した人の動機とかねあるいはその告

発した人が不埒か不埒じゃないかなんてのは本来どうでもいいっていか本来は本筋の話ではないのですけれども、例えばああいう形でその政権そう思ったんでしょ。あれ間違いなく官邸がリークしてるんですけれども、前川はこんなヤツだよと、こういうふうに言うことで、前川が何を告発しようがマスメディアは相手にしなくなるだろうっていうことを期待してあいうリークをして書かせたのは間違いがないと思うんですよね。だからただ幸いなことに前川さん、喜平さんというのは、僕もその後多少親しくお付き合いさせてもらってますけど、幸いに僕のような不埒な人間ではなかったんで、どうも最初にね会見で、社会勉強だと。で行かれたんだと僕なんかも

海渡： 女性の貧困問題。

青木： 女性の貧困か。を調べに行ったんだって。僕なんかそれ聞いて、いやーもういくらなんでもそんな言い訳通用しませんよ前川さんって僕思ったんだけど、それは僕が不埒なだけだったので、前川さんはそういう人ではなかったっていうのがある種救われたところなんでしようけれども。それはともかくとして。

海渡： 僕、このニュースの中で恐ろしいと思ったのはその後ですね、彼は毎日新聞のね2019年6月20日に「官邸ポリス」っていうのは、本の中身についてインタビューを受けてですねこのときにね、杉田さんに官邸に呼ばれたときに、〇〇省の〇〇次官にもそういうことがあったよと言われたんですけど、それでみんな尾行されているのかと思いましたと、弱みを握られてる人は役人だけではなくて与野党の政治家の中にもメディアの中にもいるかもしれないとそう思いましたって言ってんですね、これ。これはやっぱり実際にその被害を受けた人が言っててしかも、自分以外の時間でもそういうふうにされてる人がいたっていうのもかなり決定的な証言じゃないかなと思うんですよね。

青木： 僕、ぜひ読んでもらいたいですけど「日本の公安警察」でももう書いててですね。これは先ほど申し上げたように本当に事実ベースの話だけをしますけれど、その前川さんに関して、あの情報を誰が掴んだのかっていうのは、正直言ってよくわからないわけですよ。ただ僕の取材経験だけで言うと、取材経験だけで言うと僕が担当したのは先ほど申し上げたように1990年代ですね。あのときに、当時今もその気はありますけど今よりも当時ってのはいわゆる日本の治安機関とくに公安警察の最大のテーマっていうのは何かって言うと、反共なんですね。要するに共産主義が有名な警察官僚の言葉があって、泥棒の1人か2人捕まえなくても国は滅びないけど、共産主義がはびこったら国が滅びるとというのが基本的に日本の治安機関たる警察の中の情報源である公安警察の基本的なレゾナートルだったんですよね。つまり警察ってのは基本的には犯罪が起きたことを確知して捜査するわけじゃないですか。ところが情報機関である治安警察の公安警察の場合は、その犯罪を起こしそうな連中を、まさに共謀罪の話に繋がると思うんですけれども調べると、あるいは危ないやつを調

べて未然に犯罪や危険性を除去するっていうのが、公安警察の役目なわけですね。ていう活動していく中で、例えばこれは僕は公安警察の幹部から実際に取材をして本にも書いた話ですけど、例えば国家の治安とか基幹産業みたいなところ、例えば原発関連産業とか防衛産業とかそういうその基幹産業の中にスパイが入り込まないか、あるいは共産主義者が中に入り込まないかとかっていうことを監視するのも、彼らにとってみると仕事なわけですよ。それは当然、中央省庁の幹部クラスっていうのもその対象なわけですね。僕が実際に聞いた話でいうと、これは自慢話として僕は聞いたんですけど、ある中央省庁である局長人事。局長っていうのは皆さんご存知の通り、省庁の中でももう本当トップテン位に入る幹部人事ですけど。局長人事で、ある中央省庁の局長人事が内定して公安警察はひっくり返ったと。なぜなら、そのうちの1人がかなり枢要な局長、内定についていた人が内定した人が公安警察がかねてからかなり共産主義者、共産党のシンパだと目視している人だと。実際に調べてみたら中央省庁の中にいますよね。いても全然構わないんだけど僕は思うんだけど、勉強会なんかも開いたりとかして共産党にいろいろ近い活動なんかをしている人が局長に内定しちゃった、これはまずいとということでは何をしたかって言えばその公安警察が、そういう部隊、追跡部隊を使って、その局長を24時間体制で尾行したと。尾行した結果妻以外に愛人がいるということがわかって、その現場も写真に撮ったというんですね。僕はその写真にどうしたんですかって言ったら、その当該省庁に公安警察から内々に通告をして、その局長人事はひっくり返したっていう話をそれでも80年代ぐらいの話だと思うんですけど、僕が90年代のことです。それは公安警察の論理で言えば、中央省庁のましてや枢要とか幹部クラスに共産党のシンパが入り込むっていうのは、これは彼らにとっては危険だとまずいっていう発想なわけですよ。だからその彼らの論理で言えば危機管理ですよ。

危機管理だから、僕はだから前川さんがましてや彼は次官ですから、文部科学省の次官になる人間がどういう人間なのかいわゆる身体調査じゃないですけど、そういうものをするっていうことは全く不思議じゃないし、かつ今回の件の一番ポイントとなるのは、これ今日の話にも多分繋がると思うんですけど。

これを前川さんに言った人間ってのは誰かって言うとその官邸に呼び出して言ったのは杉田和博さん。杉田さんってのは当時、今もそうですかね官房副長官。官房副長官というのが3人いて、2人は政務担当で政治家から選ばれて1人は官僚から選ばれると、これがそのまま事実上官邸にいて、日本の霞ヶ関組織のトップになるわけですけども、これまで官房副長官というのは海渡さんよくご存知の通り、警察から行くってのは珍しかったんですね。

むしろ財務省だったりとか、自治省総務省だったりだとか他の省庁が多いんだけど警察官僚で官房副長官をやったことがあるっていうのは最近だと漆間さんっていう人だったんですけど、漆間巖さん。で杉田和博さんのは警察出身の官房副長官珍しいんです非常にかつ、彼は警察組織の中でずっと警備公安部門をやってきて最後の役職がおそらく警備局長ですね、警察庁警備局長を務められていて、警察庁警備局長というのは、公安警察のドンなんですよ。その人が官邸にいて官房副長官についていると。そうすれば彼の仕事としては、むしろそういうことをするでしょう。つまり政権として危機管理する上で各省庁のトップだとか幹部におかしな奴はいないかというのは常に調べておいて情報集めておくということをするって

う意味で言うと、おそらくその杉田さんの指示なのか、あるいは杉田さんのような人が官房副長官についてるから、その警察組織から積極的に情報が上がってってるのかわかりませんが、まあこれぐらいのことするだろうなど。これをどう制御するかってことになってくるとだからこういう情報の使われ方っていうのはあまりにも危険で、だってこれ、前川さんがおっしゃってるようにそういう情報を例えば杉田さんを中心とする治安警察官僚がストックしてるんだとすればこれ自分に気に食わない政治家とか、自分に気に食わない官僚もそうだしメディア人もそうだけでも、社会的に抹殺することができる。

海渡： そうですね。

青木： ていうことになるんですよね。だからこれは非常に前川さんのケースっていうのは深刻に捉えるべきだし、もう少し真相を解明しなくちゃいけないだろうなどは思いますよね。

海渡： 今の官邸の中には今も国家安全保障局の局長になってしまわれましたけれどもちょっと前には内閣情報官北村さんがおられたわけですけども、僕は今回のこの共謀罪っていうのは、官邸の中の、とりわけ北村さんを中心とするですね部分が一生懸命制定に走ったんじゃないかなというふうに思うんですよ。

僕はずっとこの2003年頃からこの共謀罪の問題を追っかけてたので。もともと2003年に法案が出てきたんですけど、このときの法案は、明らかに国連に行ってこの国連犯罪条約の審議に携わっていた法務官僚と外務官僚がこの条約を批准するためにはこういう法律が必要なんだと言い出して作ったものなんですね。それは疑いがないと思うんですよ。でもその当時の触れ込みはこんな極端な法律は使わないから使わないけど条約批准するためだから作らせてくれっていうふうに言ってたんです。けれどその言い分があまりにひどいっていうことでその後3年ぐらい結構盛り上がるまで行ったでしょうか。

2006年の段階でかなり当時としては法案反対運動として盛り上がって、ちょうど小泉さんが首相の頃でした。あの河野洋平さんが衆議院議長だったと思うんですけども。

もうまさしく衆議院の法務委員会で強行採決がされるっていう、そういうふうに僕らも予測しているその瞬間にやっぱりやめとこうっていうふうに2人が話し合っってこの法案の審議、審議がストップするんですよね。その後もうこの法案は廃案になって約10年間出てこなかったっていう経緯があるんですよ。

そして今回出てきたときに2010、13年14年ぐらいから秘密保護法であるとか、平和安全保障法制とかそういうのを作ってきた、それ官邸が作ってきたんですけどその流れの中であのもう一度復活してきたんじゃないか。そこで名前も共謀罪じゃなくてテロ等準備罪とかに変えてですね。出てきたということではっきり法案を推進している主体そのものがこの10何年の間に入れ替わったような感じがするんですよね。

青木： 入れ替わったってというのは？

海渡： 要するに外務、法務を中心とする官僚がやってたものが官邸が仕切ってやる。明らかに今回やっぱり外務省や法務省は別に積極的でなかったし、やれっていわれたらやりますと、いうふうに言ってやったんですけれども。

そうですね、まさにこの法案作る作業で法務省で中心になってやられていたのが、1人が黒川さん官房長であり、1人が林真琴刑事局長だったんですけどね。

2人ともそんなに熱心だったとは僕には見えませんでした。そこで内部でどんな話がされたのかわからないんですけどね。その辺はどうご覧になりますか？

青木： 僕は政治記者ではないのでここ3年前の共謀罪がどういう力学で作られたのかっていうのは僕はつまびらかに取材してるわけじゃないんですけれども。

海渡： だれも明らかにしてないんです。僕が推測を述べただけです。

青木： ただ、やっぱりその10年前っていうふうに海渡さんがおっしゃったのと今の決定的な違いっていうのは、先ほどちょっとお話したように警察官僚がこんなに政権の中樞っていうか、官邸に刺さってるっていうのは、おそらく戦後初めてのことですよね。これってものすごい地殻変化で今官邸っていうか安倍政権というのは経産省内閣だと今井さんっていう側近が、安倍のマスクだったりとか、事業化何とか給付金だったりとかっていうことでめっちゃめっちゃやってるって話もあるんだけど、もう一つの側面でいうと、経産省内閣であると同時に、警察内閣みたいなのところもいえて、だから政権の要である官房副長官には、先ほど申し上げたように杉田さんっていうもともと警察庁警備局長だった警察官僚がついてると、これは歴代の政権でも非常に珍しい警察官僚そもそも警察官僚に官房副長官ってなかなか務まらないって言われたんです。あの各省庁を睥睨しなきゃいけないので、なかなか難しいと言われたんだけど杉田さんがついてると、それから内閣情報官だった北村滋さんっていう人が先ほどってとおっしゃったようにNSCの事務局長になったと。この人もずいぶん官邸に安倍政権になってからずっといてやっていますよね。今でも首相動静何かをみると毎日のように安倍さんに会ってるんでしょ。そのこの2人を中心として官邸に警察官僚が突き刺さってる、例えば最近宮内庁長官だって今度警察官僚ですからね。だから警察官僚というものをものすごく厚く遇してしているっていうのが今の政権の特徴で、それでですね、

海渡： すいません。その点でもう一つ問題なのはしかもその内閣情報官の役割っていうのが内閣情報官や、内調の採用案内の文書ってあるんですよ。これを見るとですね若き日本国家を支えようとする優秀な諸君は内調にキャリアとして来っていうふうに書いてて、そこで何をやるかっていうとですね。総理の目と耳として役割を果たす。これははっきり書いてあるんですよ。

総理の目と耳としての役割。その内調ってというのは僕は警察じゃないのに警察と同じようなことをやっている。そして警察だったらですね、その総理の目となり耳となっちはいけないわけですよ。政治権力から中立なきゃいけないそうですかね。

だけれども、うちは警察ではありませんということで内調が総理と目と耳の役割を果たすんだと。だけどすぐその手足となって働くのは公安警察なんですよ。

青木： 内調っていう組織をあんまり誇大視する必要は僕はないんじゃないんじゃないかと実は思ってるんですけど、先ほど申し上げた先ほどから申し上げている「日本の公安警察」って書いたときは一章を設けて内調のことも書いたんですけど。

内調ってというのはそもそも吉田茂政権のときに1957年だったですかね、に作られたんで、日本には専門の情報機関というものがないと、それが良いか悪いかってというのはまた議論があって、僕はあんなものない方がいいと思ってるんですけど。

ていう中で内調ってというのは内閣直属の情報機関として作って大きく育てたいっていう欲望があったんだけど、実は警察もそれを望まないんですね。

なぜかっていうと情報機関が出来たら公安警察の仕事とられちゃうじゃないですかっていうのもあったりとかして、そういういろいろ力学が働いたりとかあと戦後民主主義の一定程度のなんていうのかな籬が効いたところがあって、内調ってというのは僕が取材した1990年代の段階で職員がせいぜい200人位しかなくて、あえて言いますと「しか」なんです。これはいわゆる本当に例えばいろんな尾行したりとかいろんな工作をしたりとかっていうその活動するために200人ってというのは小さいんですね。

実際に当時僕は内調の人たちも知っている、もちろん今も知っている人いるんですけど、例えば彼らに言わせれば、所詮各省庁からの寄せ集めで、せいぜい新聞の切り抜きしてるぐらいが僕たちの仕事だ、

海渡： それは知ってますよ。だけどそれは僕は変わったんじゃないか。かなり僕は根本から変わっててね、

青木： いや、あのね要するに内調の位置付けってのが変わったって、その通りでそれをこれからお話するんですけども。内調って組織自体がものすごい肥大化っていうよりももっと大きな構造が変わったと思うんですよ。

海渡： どういうことですか？

青木： つまり、警察この国のいわゆる情報、インテリジェンスコミュニティーなんて大嫌いな言葉なんですけれども、いわゆる治安機関の世界ってというのは警察の公安部門が主役なんです。全部牛耳ってる内調の室長、今内閣情報官ですけどこれも警察出身者でしょ。さっき言った電波部長。電波部だったでしょ。電波部のトップ電波部長も警察なんですよ。

つまり公安警察が牛耳ってますね。しかし、公安警察ってのは先ほど海渡さんがおっしゃったように政治から一定程度の距離を置いて独立してなくちゃいけないと。つまりだから公安委員会制度もあるんですけど、

海渡： 不偏不党って警察法に書いてあるわけだから。

青木： っていうのが、おそらくもう僕が取材をした90年代くらいまではかろうじてあったんですよ。ところが、だから、例えばね、内閣情報官が内調のトップの内調室長とか今の情報官とかなんていうのは、警察の中で長官とか総監にはなれなかった人が、その前の段階でいく。だからさっきの杉田さんなんか内閣情報官やってますけれども、あの人は警備局長から官邸に行って内調のトップになったわけですよ。そういう人がいくポジションだったんですね。ところが最近、警察のトップってのは昔から地位のトップは警察庁長官、階級のトップは東京首都警察のトップである警視総監、これツートップでだいたい年次が1個上ぐらいの人がだから海渡さんのように東大法学部卒して警察官僚になって出世して行ってトップが警察庁長官でその次ぐらいが警視総監とかっていうこういう形だったんだけど、今多分その構造自体が変わったんですよ。つまり警察っていう組織が警察官僚っていう組織がもっと肥大化っていうか力を飛躍的に伸ばしておそらく警視総監かよりも官邸にいる北村さんとか杉田さんとかああいう人達のほうが偉いんですよきっと。

海渡： 僕もそう思います。その通りで、実はねこれは今日持ってこればよかったのですが、講談社から出た「官邸ポリス」って本がありましたね。

青木： 読みました。謀略本みたいな、なんかデフォルメしたね。

海渡： あの本1回目読んだ時こりゃ気持ち悪い本だなと思ったんだけどよくよく読むと、あれは何か安倍政権を称賛するようにして実はなんか内情はこんなひどいことになってるっていうことを告発するために書かれた本かなと僕は感じたんですけどね、そのあの中で警察組織の中が、どうも二重構造になっているようで普通のラインの構造とその中の主だったメンバーを官邸ポリスとして任命していく。そしてその人たちは、普通は警察業務をやりながら官邸のために使えるような情報活動もしてるっていうふうに書かれてるんですよ、あの組織構造ね。これは確認のしようがないです。本当にそんなことになってるとしたら大変なことなんだけれども、でもなんか僕は今の政治全体見ると本当にそういう組織構造が何か動いてるというふうに考えないと説明がつかないような現象が起きてる。

青木： そうですね。つまり国家公安委員会のもとにその警察は警察庁は管理されなきゃいけないし、あるいは首都警察である警視庁であれば、東京都公安委員会のもとで管理しなくちゃいけないんだけど、そのキャリア制度を中心とする警察官僚の世界の中で、その管理に服している警察庁長官が実態は服してないんですけども、警察庁長官とか警視総監

というのがナンバーワンはナンバーツーだった時代から変わって要するに官邸に刺さるようないわゆる警察官僚って治安行政官僚みたいな連中が官邸に刺さって、その代表格が北村さんや杉田さんみたいな人たちなんだけれどそうなるようになってくると脱法的というかね、本来は警察法に、何て言うの独立しなくちゃいけないって書いてあったって組織としてはだっ
てほぼ一体なわけですからね。

そうなるようになってくると警察にとって都合の良い政策というものを誘導してくれるような政権であったりとかそういう政権に刺さって、全体図を動かすみたいな人達っていうのはでかい顔するわけですよ。

海渡： だからそういう意味であのこないだの選挙のときに、たしか北海道でこの安倍首相に野次を飛ばした人がその場の現場の警察官によって排除されましたよね、ああいうことも今までの警察で起きないと思うんですよ。その実際に警察っていうのはどの党派も平等に扱わなければいけないっていうねそそういう観念もあったと思うんですよ。形式的かもしれないけれど。

青木： でもそれはかつて、例えばこれも聞いて僕も昔、その公安警察の本に書いたんですけれど、例えば警察の中でも一番秘密性の高いって言われている公安警察の中でも高
いって言われてるような部隊の忘年会なんか、その自民党の衆議院議員の人が来たりとかね
やっぱそんなことそういうことがあったとかっていう話があってある種だからさっき言った
反共とか、共産主義者を監視するんだみたいなベクトルの中で政治と警察ってものがほぼ一
体化してたっていうことはあると思いますし、今の状況の中で北海道のねデモ参加者を警察
が排除していくみたいな声を挙げた人だけ排除していくっていうのが、

海渡： あれは野次を飛ばしただけですよ。

青木： そういう力学の中で起きているのかあるいは今最近のね忖度みたいなもので起
きているのか。そういうわからないんですけどただ全体状況として、警察っていう組織的に公
安警察みたいな組織がかなり変質をして、かつてのその反共一辺倒っていうかね、反共だけ
を馬鹿みたいに唱えているような人たちではなくてむしろ政権に突き刺さっていろいろ政権
の周辺で動いたりとかって、実際今、その転機がおそらく90年代末から2000年ぐらいだ
ったんですけど、冷戦体制終わって、いつまでも共産主義者が怖いんだみたいなこと言た
って俺たちの仕事はないよねっていう時代があったわけですね。

だからそういう時代から脱皮して、例えばテロ対策であるとか、あるいはもうちょっと治安
対策、国内の治安対策みたいなところに脱皮していく過程の中であの北村さんみたいな人と
か、それから杉田さんみたいな人たちが、ある種の化け物として官邸に入り込んでいき官邸
の方も便利だし今の政権馬鹿なので便利に使われているという話の中でおそらく共謀罪法も
あったし、

海渡： そんな感じがします。

青木： 特定秘密保護法もおそらくあったし、それから通信傍受法の改正っていう拡大するのはひょっとすると、それこそ黒川さんあたりの仕事のかもしれないですけど、やっぱり治安法をどんどん作るっていうのは警察官僚にしてみれば、馬鹿な大将を使って俺達の思惑通りにいろいろできてるぜって想いがある。

それがあの「官邸ポリス」の中に出てくるようなものすごい傲慢で、あれはちょっとデフォルメしてると思うんですけども俺達が日本の治安を守ってるんだ、日本の国を動かしてるんだみたいな、ああいうデフォルメした論理みたいなものもあながち間違いではないっていうかそういう雰囲気をもっているような人はいるのかなと。だからちょっと危ないですよ。

海渡： そういう状況の中でですね、今日はコロナの話をした方がいいと思うんですけども要するにコロナと監視社会っていうことで、ちょっと話をしてみたいと思うんですが。やっぱりもともと僕はアメリカのスノーデン氏の告発したような世界的な監視網あるんじゃないか、そういうものの中で日本も位置づけられているんじゃないかっていうふうに考えてきたんですけども、今回のコロナの問題が起きて、やっぱり中国のですね、監視システムっていうんですか。

これが結構コロナ対策でも効果を発揮したっていうか、そしてその感染している人を見つけ出して、感染の拡大を防いだとしてというようなことを宣伝してますよね、中国で。だけどその一方で、香港に国家安全法を作って反体制的な活動は全然できなくするとか、民族ウイグル族とかそういう民族的少数派についてもやっぱり非常に発言できないような環境を作っていく。中国の監視社会っていう問題をそれがすごく日本にとっても身近な問題として議論しなければいけない問題にもなってきたと思うんですけども、そしてそのアメリカ型のものと中国型のものっていうのがいわゆる携帯電話の次世代をどちらが覇権をとってやるのかっていうことも何か関連があるような気がするんですよ。

世界的な監視社会の中で、そのアメリカと中国。日本は日本、アメリカの方に巻き込まれてるんだろうと思うんですけども青木さんはその辺のどこをどのようにご覧になっていますか。難しい問題かもしれませんが、

青木： 中国、例えば中国とアメリカの今後多分10年20年下手すると30年間続く覇権争いみたいな中で、中国型のね、体制ってものが優位に立っていくような時代っていうのは、僕は断固拒否したいなとは思いますが。

ただ一方で、アメリカだってどうなんだよというところが確かにあって、僕は米中の覇権争いとか中国型の監視社会なんて監視会社なんて世の東西、政治体制の左右を問わず僕は断固拒否したいんですけど。

それで言うところちょっと話が軸が少しずれますけれど、僕らがやっぱり気をつけなくちゃいけないのは、中国は勿論なんだけど、アメリカもそうだし、おそらくは日本もそうなんですけど、治安機関とか情報機関とかっていうものに、過大な権限を与えて且つ適正なチェックをしないととんでもない事が起きるっていう、これは本当に社会体制の左右とか世の東西とか関係なく起きるわけですよ。例えばあんまり具体で言うと不適切じゃないかもしれないですけど北朝鮮がどうなんだろうかっていうことも含めてなんですけど。

例えばアメリカだってね9.11テロがあって、当時のブッシュ政権がとにかく、テロ対策っていうことで、そのNSA国家何っていったかなあ。国家安全保障庁ですかね。NSAっていう情報機関にもものすごい権限等それから愛国者法っていうような権限と法律を与えたわけですね。金も与えた。そしたら何が起きたかって言えばそれから5年10年の間にバーっとお化けみたいな組織になっちゃったわけですよ。

つまり世界中のありとあらゆる通信網そのデジタルデバイス何かインターネットだったりとかメールだったりとか、携帯電話だったりとかっていうものを貪欲にかき集めて、それこそGoogleだったりとかAppleだったりとかっていうところまで圧力かけて、その情報吸い上げるそれはスノーデンさんが告発したその、

海渡： スノーデンさんの自伝僕も読んだんですけど、あれ読んでると、その9.11が起きてね彼自身も愛国者としてそういう国防のために働こうと思ってそういう組織の中に入っていても実際に働いてみると、これ自身、人間がやってていいことをやっているんだろうかっていうふうに深刻に思っていく過程、僕は彼自身がすごく文筆家だなと思ったので、その辺の彼の精神の内部で起こった葛藤みたいなものがですねものすごくよく描けてましたけど、ああいう人が生まれてその内部の実態というか、そういうことが現にアメリカの社会の中核の部分で起きてたっていうのも僕ら知ることができたんですけども、

青木： あれはすごいですよね。つまりおよそありとあらゆるとにかくネット通信の情報ってもの全部かき集めて挙句の果てにはドイツのメルケルさんの携帯電話からブラジルの何だっけ何か政権関係者の電話から片っ端から盗聴してて、しかも国内の情報だってもかき集めてそれを蓄積してるっていうわけでしょ。だからさっき言ったそのXkeyスコアっていうのもスノーデンさんによると僕はITスキルはあまり高くないので僕の理解ですけど、つまりそうやってNSAの世界中の通信網から情報をかき集めた情報があって、そこにアクセスできるソフトがXkeyスコアですよ。

海渡： そこにその個人のメールアドレスとかですねそういうものを入れるとその人が送ったメールが全部見れちゃんですよ。

青木： メールもそうだし、あるいはこれぞっとするんだけどインターネットの閲覧記録であるとか、それから携帯電話の通信履歴であるとかっていうものも全部出てきちゃう。そうなってくると僕なんかちょっとゾッとするのは、例えばねちょっとHなホームページを見

てましたとか、あるいはその誰と連絡をしてましたとかっていうことがほぼ丸裸になっちゃう。

海渡： 不倫関係なんてもう全部バレバレになっちゃいますね。

青木： 不倫関係から好きな、なんてのなんていうか性癖のタイプとかね、全部わかっちゃうわけでしょ。スノーデンさんが日本に提供したって言ってて官房長官菅さんがそんなの承知してないって言うてるんだけど、僕がある防衛省の関係者に聞いたらさっき言った、電波部で使っているとあるんです。これまで微妙で、僕は僕が聞いた人はね。これって憲法が禁じるその通信の秘密を侵すことになるんじゃないのっていう話をしたらギリギリ違憲にならないところで運用してるっていうんですよ。

どういふことなのって聞いたらこれその人は直接それを運用しているわけじゃないので、直接運用したら書いちゃうんだけど、推測なんですけど、これその逆に海渡さんに聞きたいんですけど。自分たちは盗聴してるわけじゃないわけですよ、通信の秘密を侵してるわけじゃないわけですよ。つまり、データベースはアメリカにあるわけですよ。世界中の利用やベースへのアクセスデータですよ、データベースにアクセスしてそれを使ってるだけだったら、これは通信の秘密を侵していることにはならないとこういう理屈らしいんですよ。

海渡： データベースのアクセス権だけをもらってくる。ほんとかなあ。

青木： だからそれをだからデータの例えば電波部で使ってるっていうわけですよ。さっき言ったように、防衛省もすごく最近では安倍政権下なんかで、防衛力増強されたりとか人増やしたりとかしてて、省にも格上げされたりとかして独自の権限が増えてるんだけど、さっき言ったように肝心なところは警察官僚が抑えてるわけですよ。電波部長なんかわけね、ということつまり今だと警察庁長官というよりおそらく杉田さんとか北村さんとかが中心として、その治安管理警察官僚のもとに、例えば防衛省が電波部のそういう Xkey スコアみたいなデバイスを使える。今内調が一応管理している建前になっているんだけど、衛星も飛ばしてるでしょ、衛星を飛ばしてどれぐらいの精度があるのか。1回も映像が出てきたことがないのでわかんないんだけど、

海渡： かなり凄いとされている。特定秘密保護法で秘密指定されているものかなりの部分がその映像でそうですよね。

青木： そうですよね。だから全部飛ばしてるってかつ例えば国内においては北海道から沖縄まで津々浦々にいまだに公安警察っていうのは北海道警もその沖縄県警もそうですけど万単位の人たちがいるわけでしょう。かつては共産党の中にしっかり作るのに必死になって

いて、今もやってるとは思うんだけど、そういう人員もある。つまり、そのデジタルデバイスから衛星からそれから、旧来型のその電波傍受組織からそれからそういうヒューミント。人を使ってのその情報活動、尾行だったり追跡だったり協力者工作だったりとかっていうこともできる。

って考えるとやっぱり警察という組織が持っている情報量、情報網ってのはすごいし、そこにだから問題なのは僕は今の政権は本当に馬鹿だなと思うんだけど、例えば特定秘密保護法とか共謀罪とかそれから通信傍受法の強化とかっていうのを易々と与えたり、

海渡： 実は今回のスーパーシティ法案ってのもそれに関係があるような気がします。

青木： だからね、僕はこの前川さんもおっしゃってて前川さんとその議論したことあるんですけど。

政治家ってここまで馬鹿なのかと、あんたたちね、今は政権をとってるから自分たち大丈夫かもしれないけど、例えばとんでもない僕が仮に政権とったら、そしたらもう安倍晋三のプライバシーを徹底的に調べだせってXkeyスコア調べさせて、僕暴露しますよ。そういうことを起こしかねないでしょうと。だから情報機関とか治安機関とかってというようなものってというのは、政治があるいは市民社会もそうなんだけど、市民社会と政治がきちんとコントロールしておかないととんでもない暴走をしかねないということを安倍さんっていう人は多分考えてないんだと、だから馬鹿だなあと思うんですけどね。だから危ないと思いますよ。

海渡： そうですね。実はですね僕はあのスーパーシティ法案のことをね、本当にこの国会で成立してしまったんですけどもまだあんまり知られてないかもしれませんけれどもスマートシティって言ったりすることもあるんですけどもはい。

結局日本の国の中に特定、国家戦略特区を作ってそこは個人情報保護の仕組みを一旦ご破算にして、条例なんかで何でも決められるっていうふうにして、そして顔認証とか、取引履歴とかそんな全部串刺しで集められるようにして、そして便利な都市を築きますと。独立国家みたいなものを造るんですというふうに、あの竹中平蔵さんは言ってるんですけどもこれはきっとすごくそれぞれの自治体にお金が出るのかもしれませんが、すでにたくさん自治体が手を挙げて、それに名乗りを上げようとしている。コロナの元で検察庁法の改正案の問題が大問題になって、その直後ぐらいだったんでかなりの人がこれは危険のある法案だになっていうことぐらいは認識して下さったんだろうと思うんですけども。

まだまだこの問題知れ渡ってなくて、密かに成立してしまったということ。

スーパーシティ法案とかは青木さんどう思われます？

青木： スーパーシティ法案もそれなんですけれども、だからやっぱり僕らそろそろ考えなくちゃいけないのは僕が冒頭申し上げたように、僕がその治安機関とか警察公安警察の取

材をしたのはデジタルデバイスがまだなかったっていうかほとんどなかったあの時代。あって、僕なんか問題意識で取材したのはNシステムとか、いわゆる監視カメラ、防犯カメラっていわれてる監視カメラですよ。歌舞伎町なんかも凄くたくさんありますけど。

そういうものが、

海渡： それっていうのは顔認証になっていますね。

青木： そうなんですよね。僕そのスーパーシティ法案もそうなんですけれども、スーパーシティ法案が便利か便利じゃないかって言ったら、便利なんです。だからやっぱりね、コロナの対策もそうなんですけれど、多分この流れって多分変わらないと思うんです。僕この例あちこち引用するんですけど、あれは2000年代に入ってすぐ位の頃だったように記憶してるんですけど。川崎だったかな。神奈川県で警察庁が何かこう社会実験みたいなことやってある区域だか団地だかで、子どもの通学路に監視カメラをワーっとつけたんですよ。で住民にアンケートとったら、その警察の発表なのでちょっと眉毛に唾つけて見る面もあるのかもしれないんですけど、住民の8割位が子供の安心安全のためには多少のプライバシー侵害止むを得ないっていう答えだったらしいんですよ。僕それだったらこれ海渡さんと話したことあったと思うんですけど、日本って殺人事件が減ってきて1000件くらいじゃないですかだいたい年間。そのうち500件位家族間でしょ。親族家族間じゃないですか。そしたらその500件をなくすためには、全部の家の家中にカメラつけたら事件がなくなる一発で解決するんじゃないかっていうんだけど、さすがにオッケーする人はいないんだけど、でも多分この流れと止まらないと思うんですよ。だから顔認証だって防犯カメラ監視カメラの顔認証だってどんどん発達していくし、警察がどこまでやってるのか今僕知らないんですけど、でも例えば警察庁の中に、あるいは警察施設の中に防犯カメラの例えばコンビニもそうだし、街の防犯カメラもそうだし、あれを多分デジタルで全部ネットワークで繋ぐっていうことはおそらく技術的にはもうできるだろうし、

海渡： それは僕はねスーパーシティではやるんだろう。それができるように、今までそういうことはしてはいけないっていうのは個人情報としての、それぞれの同意があるとか言ってたんですけどもそれを取っ払おうとしている。一定の自治体でやって、すごく何ていうか成功したとかいうんで、日本全国そういうふうにしちやおうっていう計画なのかと思うんで。

青木： そういう方向の動きってのは、多分利便性だったりとかコロナの対策でどこまで有用性があるのかっていうのは大いに議論があるにせよ、中国は極端にしても、韓国なんか

海渡： 韓国やったんですよ

青木：　　そういえば、韓国はね、僕は長く暮らしましたが、あそこはものすごい民主化されて日本なんかでも先進的な民主主義のところもあれば、今でも準戦時国家なのでやっぱり国民総背番号だし、それこそいろんな番号が必要で、ないといろんな買い物もできないみたいなところもあったりとかするんですけども、でもそういうところだから、多少の監視もできるっていうシンガポールなんかもそうですよね。そっちの方向に行くべきじゃないと思ってるんですけど、ただ技術の発達によって多分コロナの対応なんかも含めて必要だろうっていう流れは多分ね、あるいはできちゃうよねっていう流れは多分止まらないと思うんですねこれね。

だとすれば、

海渡：　　確かに、感染源からの経路を特定するためにねスマートフォンを使えるんだって言われれば嫌ですっていうふうに言いにくい面があると思うんですけども、この問題実際 NHK の特集で、あのずっとその話されてたイスラエルの歴史学者のハラリーさんっていう方が僕は聞いてなるほどと思ったんですけども、そういう確かに監視のために一定そういう情報を集めた方がいいと場面はあるかもしれない。それによってその感染拡大で抑えられるかも知れないけれどもそういう情報を警察や軍に集めちゃいけないんだそうです。

そこに集めるんじゃなくて健康のその管理を集めるところにだけ集めて、その目的が終わったら廃棄するんだとそれをきちっと決めなさいっていうふうに彼は言ってますよね。

青木：　　まさにそういうことで利便性だったりとか、感染症対策だったりとかあるいは犯罪捜査だったりとかも含めて多分デジタルデバイスでだったりとか AI も含めた IT なんかの発達とかっていうものが止まらないのでそうなってくると利便性はあるよねと、感染症対策にも有用だよと、あるいは犯罪捜査にも多分有用なんでしょう、だって僕なんかも本当にもう時代が変わったなあと思うんだけど今だって警察官が、事件が起きて、捜査の現場に行けば、何を一番最初に何をやるかっていうと、ちょっとそこら辺の防犯カメラからとにかく画像を集めてくるっていうのをその、

海渡：　　あとスマートフォンを取り上げるそうです。

青木：　　その専門のチームもあるでしょう。新聞社の取材だったそうですよテレビもそうだけど、現場に行ったら人に話聞くよりも先にとにかくカメラないですか、撮ってませんかかってやるっていうわけでしょ。そういうふうになってきたら多分止まらないので、だからこそまさに海渡さんも今、そのハラリーさんの話を紹介されたように、誰がどうやってどこまで使うのかっていうのをきちんと歯止めをかける、あるいはだから透明化してね、例えば感染症対策で言えば、こんなもの治安機関に使わせる必要は一切ないでしょうと。

だったら、その例えばそのスマホの何ていうの履歴にせよをあるいはその他のデバイスのその情報にせよ。それをあるいは感染症対策のチームのところに限って使って使い終わったら廃棄してくれっていうことをすべきだし、あるいは監視カメラや防犯カメラの映像が犯罪捜査に有用だったんだったら、例えば極端なことといえば裁判所の令状とってやってくれと。そのネットワーク化したとしてもですよ、裁判所の令状を取ってみてくれと。で見た上で記録はすぐに廃棄せよと、もちろんの事件で裁判にするんだったら裁判のときにそれは必要なんでしょうけれども、だから、

海渡： 関係ないものは廃棄するですね。

青木： そういうことですね。我々がまさに情報コントロール権だと思うんですけど、

海渡： 僕はやっぱりすごく、両義性があるなと思うのは、例えば今の世界中で盛り上がってるその人種差別に対する抗議のねこの活動っていうのも煎じ詰めればですね要するにアフリカンアメリカンの方が警察によって殺害されていくシーンをその一人の人がスマホで撮ったわけですよ。その映像の起爆力っていうかあれを見てみんな驚いてまさに警察権力の使われ方の現実として知ったことによってあいうことが起きたわけで、それは一人一人がその現場で勇気を持ってそれを撮って発信者になれば、世の中を変えられるっていうことですよ。ねこともあるんですよ。

青木： だからそれはもう正に本当に僕が改めて申し上げるまでもなく基本的にツールなんていうのは、例えば包丁だってね、人を殺すこともできればおいしい料理を作ることもできるわけで、この間の警察庁法改定に抗議します、あれも匿名の女性の会社員の方がやったのが、そこまでの起爆剤になったわけですし、一方でね木村花さんでしたっけ、なくなっちゃうようなネットいじめみたいなのもあるので、だからやっぱりそれはツールなので、功罪両面あって、功の部分はいくつあると思うんですよ。だからデジタルデバイスって全部多分そうだと思うんですよ。だから今の政権の言ってることが全く逆なので僕は腹立たしいですけど。

できるだけこれ何に使うか、どう使うかっていうものができるだけ透明にして公開した上でどこまで使うか誰が使うのかっていうのをきちんときちんと歯どめをかけていく。

だから特定秘密保護法なんて僕はいまだに反対ですけど。

特定秘密保護法が100歩譲って必要なのだとしたらですね、そしたら特定秘密保護法でその特定の秘密にその指定するのが適切なかどうかとか、あるいは第三者機関がきちんとチェックをできるかどうかとかいうような仕組みを作らなくちゃいけない。

海渡： 10年経ったらちゃんと公表していくとかですねそういうことがあればですね。本当に事後的に適正に行われたかチェックできるわけないんですよね。それがいいんですよ今の日本の制度には。

青木： だからそういうところできちんと歯止めをかけよねっていう形にしていけないと、ますます何かブラックボックスの中で全く我々の見えないところで使われる。だからですねスノーデンのあれで、もう多分誰も逃れられないなと思うのはスノーデンさんがそのスノーデンさんの証言を書いてくれたあれはイギリスのガーディアンで仕事している。その記者さんと香港のホテルで会ったときに、会ったら一番最初にやらされたのがこのスマートフォンを兎に角冷蔵庫の中に入れてくれて電源切ってでしたよね。

電源切ってるので大丈夫でしょうっていったら。いやこれ別に作動させてカメラもついてますし、もちろん音も取れるから、そういうことができちゃうんですよっていう意味で言うと、僕もそうですしね多分ご覧になってる方もみんな無関係ではないわけですからね。

だから制御するしかないでしょうね。監視してね、

海渡： あのそういう意味では僕はですね、今アメリカと中国って話をしましたけれども世界は3極になっててEUってありますよね、EUの世論も確かにいろいろバタバタしてる部分あるんだけど、やっぱり個人情報の件についてGDPRとか作ってて極力やっぱり個人の同意がなければ情報集めてはいけない。そして情報の収集とその運用というものが適正に行われているかをきちんとその社会として監視していこうとね、やっぱり情報機関に対する監視監督みたいなことがですね社会のテーマになってるんですよね。それを羨ましいと思います。

日本でも、やっぱりこの状況が不可避なんだとしたら、やっぱりその情報機関が適切に行動しているかどうかをですね、市民の代表も入っているような、そういう監視機関を作って、そこに適切な人が入って、そして情報をどういった情報を集めているのがどういったふうに使ってるのかっていうのを見て間違ったら正させることができそんなにやっぱりあの制度を作っていきたいなと思ってるんです。

青木： いろいろな方法とスノーデンさんとかのような方が現れて今だってアメリカによれば裏切り者とみられていて、今でもロシアに亡命状態なんですけれども。

彼みたいな人が現れるのかどうなのかっていうのは僕は結構市民社会の強靱さという意味でいえば大切だと思いますし、日本で言ったら前川さんもそうですね。

だってあるものはないとは言えないって言って告発されたわけでしょう。

ところが、あるものを改ざんしちゃった人は国税庁長官になったわけで、そういう一人一人の勇気だったりとかあとメディアの有様も大切だと思いますし、それから企業文化みたいなものだってね大切で、例えば僕はあまり詳しくないんですけど例えばAppleなんかはね、

例えば指紋認証だったりとか目で認証と顔認証とかっていうのもこのデータっていうのはこの機械だけで止めてるんでしょ。要するに Apple の方にその情報はいってないっていうんですよね。だから、そういうような企業文化みたいなものっていうのを育てていくか育つかどうか。

例えば、最近海渡さんご存知でしょうけど、去年だったかなこれは共同通信、僕の共同通信の古巣の後輩の記者たちが書いていい原稿だったなと思ってんですけどキャンペーンやっただんですが要するに捜査事項照会書です。

海渡： あれは本当にいい報道でした。

青木： 例えば TSUTAYA を運営している例えばカルチャーコンビニエンスクラブみたいなところ、Tカードか、Tカードなんかの業者に頼んで聞くと、もう基本的に無条件で警察に、

海渡： 警察から捜査事項照会！本でそういう情報を出してるってことですね。かなり広まっていることがわかりましたね。

青木： だから裁判所の令状もなく任意で発せられる捜査事項照会に大切な顧客のそのカードのデータっていうものをあのカードのデータってのね今Tカードってコンビニで何買いましたとか、どこそどこで何買いましたってポイントが付くわけじゃないですか。あのカードの情報提供されちゃったら何月何日に海渡や青木はどこの店で何を買って

海渡： 全部わかっちゃいますね

青木： 海渡はこの辺のラブホテル街でコンドーム買っちゃったってばれたらそれだけでもプライバシーな訳じゃないですか。

だからそういう情報がなんていう企業からはっきり言って、ノーチェックで出ちゃうような、そういう企業文化みたいなものもあわせて、だから社会の体力ですよねっていうのはだから海渡さんがおっしゃるように EU そうだし、アメリカもそうですけど、そういうのが出てくるかどうかっていうのが出てきたらみんなて応援したりとか支えるみたいなのも必要なのかなという気がします。

海渡： でもやっぱ僕は肯定的な面でいうと僕は今年のコロナの状況の中で、検察庁法の改正案が出てきたときにある意味、絶望してたんですよねこれ反対運動することできないと。細々とねズームでね記者会見したりとかね。そういう細々とツイッターとかフェイスブックに書いたりしてたんですよ。でもどうせ駄目だと思ってました。

正直言って。だけでも、5月の8日に法案の審議が始まってしまって、それにこれに抗議しますっていう、あの笛美さんっていうね、なんかたった1人の女性の方が何か、検察庁法案に抗議しましたかなっていう、ハッシュタグをつけてね僕もそれを見つけて一生懸命リツイートして自分でもこれに参加しますってやって最初の1日間ぐらいはね、全然駄目だったんですあれ。8日の夜から始まってね、9日の夕方にTwitterのトレンドに入ってそしたらなんかねものすごい数で増えていったんですよね。もうずっとリアルタイムに見てたんで、Twitterのトレンドって面白いのは、数値が大きくなるとまた下がったりするんですよ。

青木： あれ何か要するにだからその瞬間、その瞬間瞬間の数字だって言うでしょ。だから積み上げ式じゃなくてね。

海渡： そうなんです。だからねトータルのやつはね、ツイトレンド社っていうところが全部集めてくれてね、そこで900万ぐらいになったという数字が出たんですけどもでも。何よりもこれだけ集会もできないそういう環境になっている状況でも、そしてそういう一つの工夫をしてハッシュタグを一つ作ってやっただけで、実際に法案の審議が止まって黒川さん辞めたんですからね。

青木： あれはだけど、どっちがあのせいかわからないですけどね。

海渡： いや、もちろん週刊文春のあれがなかったらねやめなかったかもしれない。だけでも法案の審議が止まったのはあの週刊文春が出る前ですからね、

青木： いやあれは週刊文春が、わかんないです。僕はこれが裏取ってるわけじゃないんですけど、ほぼ同時なんです、あのトレンドを検察庁法改定案に抗議しますっていうのができた時と黒川氏が週刊文春の記者から当てられたのが、ほぼ同じ頃なんです。

海渡： そういわれればそうだ。5月の1日か最初やっていたんですって。

青木： 1日にやっていたんですけど、黒川さんがね、当てられたのが確か5月のね、文春の記者が黒川さん麻雀やってましたねって言いに行ったのが5月の11日だか12日だったかなんですよ。

海渡： なるほど。それだったらTwitterデモの方が先だわ。

青木： だからその政権が諦めたのを警察法改正案をもう今国会は断念するって言ったのがどちらがあれなのかわからない。だからといって僕は別に検察庁改正法案に抗議しますっていうムーブメントを全く否定する必要もないし、逆に言えば週刊文春も偉いし、

海渡： 偉いですよ。

青木： そうそう、だからそういう意味では、メディアの力それはね週刊文春が偉いって言って他の新聞とか、

海渡： 他の新聞とかメディアも実は頑張ってたんですよ。僕は何も実際にやってたからよくわかるんだけどね。NHKとかねもうね本当に僕らがねZoom上でやった会見なんかまで番組にしてやってくれてたの。それとかねその国会での審議の記録を克明にとってね、もう実況中継みたいな記事をね、朝日新聞はズーっと流してたんですよ。すごかったですよ

青木： あれに関して言えばさすがの読売産経ですら

海渡： 産経新聞すら2月からも反対していたんですよ。これもみんな知らない点だと思うんだけどそして最後の最後は読売新聞も、これは認めるべきでないとはっきり書きましたもんね。

青木： あれもしかしてメディアの不健全さを僕は感じるんですけどね、正直言うと、

海渡： もっと前から頑張るべきだと？

青木： いやそういうことじゃなくて、安全安保法制もそうだし、それから特定秘密保護法もそうだし共謀罪もそうなんだけど、あっちでは反対しないくせに、なんで検察庁法改定には反対するのかって言えばそれは僕の推測ですよ。推測なんですけど。

既存のメディア、特に新聞社のこれはもう読売だろうが朝日だろうが産経だろうが関係なく、やっぱりね、検察っていう組織に対する何かこう思い入れとねノスタルジーが強いんですよ。

海渡： なるほど。

青木： それだって各社でその社会部で偉くなって人たちってのはみんな、警視庁か検察の担当してるわけですよ。僕なんか言わせれば政権は糞ですよ。ひどいんだけど、検察だって酷いじゃないですか。

海渡： もちろんそうだけどそうなんだけど、それはひどいものがずっと固定化して今後もひどいままでやるのかね、たまにはまともな人が来たらねその政権の腐敗を暴くような捜査をしてくれる可能性が残ってるかどうかという戦いだったと思う、

青木： もちろんそれに関してはそうなんです。先ほど言ったように読売や産経ですらあれには反対したってというのは、僕は多分そういう背景だと思うんですよ。つまり、その検察というものに対する、自分が取材をしてある種、検察と二人三脚になりながら、政権とやったことがあるわけですから、そういうような人たちにしてみると、これはけしからんというふうになるっていうところなのかな。

海渡： そういう意味ではやっぱりあの流れの中でね、ツイートデモとかが始まってこれは見るに見かねてね松尾邦弘さんなんか動き始めたんだと思うのね。であのいう人達が非常に松尾さんって実は共謀罪じゃないや通信傍受法作ったときの刑事局長ですよ。僕なんかあんまりいい印象はないの。

青木： 僕この前インタビューしてきましたよ松尾さんに。

海渡： でも、もう凄くいい人になってましたね。

青木： 松尾さんは僕は何度かインタビューしたことあるんですけど、彼はよかれあしかれ、ザ検察官なんですよ。反体制側でもなく、

海渡： なるほど、でもこの時期に出てきてくれるあれ言ってくれたっていうのは僕は感謝します。

青木： それでいったら、例えば松尾さんはともかく、あのロッキード世代のね、あの意見書ともかく素晴らしいと思いますよ。その後何かこう、特捜部長経験者とか出したじゃないんですか。効果あったと思うんですけど、あれって名前見るとお前よくそんなこと言えるなみたいな捜査した人いっぱいいるんで、お前えん罪幾つ作ったんだお前みたいな人一杯

いたりとかして。話しは違うんだけど、海渡さんと多分たぶん一緒だと思うんですけど、今回あんなとんでもない法案は大問題だと思うんですけど、僕は警察もひどいと思うので僕の結論は、あれですよつまり、

海渡： まともな検察を作っていく出発点に立ったぐらいだね。

青木：僕は、海渡さんよりも世を拗ねているので、まともな警察なんてありえないと思ってるんです、結局は検察も所詮権力ですよ。政治の権力じゃないですか、っていうのはやっぱり1ヶ所に集中するのはよくないと、やはり権力っていうのは可能な限り分散しておいて相互に牽制し合ってくれてたら、いろいろ僕らも見えてくるんじゃないかと思う。あるいは相互に緊張関係があった方がいいじゃないかと

海渡：僕はねちょっとね青木さんとは違う経験をしていると思うのはね。僕福島原発の東電の役員に対する刑事告訴の事件やったんでしょ。これは最終的には検察は不起訴にして、刑事裁判になったわけですよ、検察審査会によってね。けども、あの証拠を見るとね、もう血の滲むような捜査をしてんですよ。その捜査資料をみるとねここまで捜査してくれたんだなっていうね、被害者の人たちの意見を聞くとかね、この東電の役職クラスの人に対する調査なんかにしてもね。よくここまで作ったなっていう。それにもかかわらず不起訴にした力学と現場はそれだけ捜査したんだなってそして検察審査会っていう制度があったおかげで、世の中の一般に明らかにすることができたっていうこと、そういう長い長い話があるんですけどね、僕は日本の検察官っていうのも捨てたもんじゃないなっていうのがつい最近の回帰意見としてある。

青木：でもそれ言ったら、例えば森友学園の公文書改ざんだって朝日がスクープとして明らかになりましたけど、実はあの前の段階から大阪地検特捜部が捜査しているわけですよ。だから大阪地検特捜部は知ってたし、おそらく現場の検察官たちはやりたかったんですよ。ところがいろんな力学の中で、潰されていったっていうのもあったわけですし。だから、それはやっぱり現場の、

海渡：相澤さんもなんかそんなこと本の中でちょっと書いてますよね。

青木：だからやっぱりそれは現場の職業、思想が右とか左とかっていうのはまた別として、その現場の人たちがこんなに必死に努力するっていうのは、おそらくいろんな局面ではあるんだと思うんですけどところが上の段階になっていくと、いろんなこうだから松尾さん

にインタビューして、それからサンデー毎日に書いたんでネットでも載っているんですけど、今度あれだったら読んでいただきたいんですけど。

彼も率直に言ってましたよ、やるべきだと思ったのにやらやれなかった事件はあったかって聞いたらやっぱあったと、なるほどあるとそれはやっぱり検察ってのも、行政機関の一翼なので、政権と対峙して、あるいはこの事件の捜査で突っ込んでって持つかって言ったらもたない、それが厳しいってことになればやっぱり事件を引っ込めることもあるとだから黒川さんという人が本当に事件を潰してきたのかどうかは別として、この子はそのもともと検察官っていうのはね、海渡さんもご存知の通り司法官と行政官と2本脚で立つみたいなそんなところあるじゃないですか。

行政官としては優秀なんだけど、司法官としてはどうかっていうちょっと不安があったんだけど行政官として優秀なので彼は政権の意向なんかを法務省に伝えと、一方で、特捜部なんかの捜査があると。それは最高検はみてさあどっちにしようかって言って、やるやらないはおそらくだから甘利さんの件も、そこまでの松尾さん明確に言わなかったけど、甘利さんの件も森友事件怪文書公文書改ざんもやらないって判断をしたんじゃないかっていうことなんでしょうね。だからやっぱり

海渡： その判断がもう固定化されてましたからね
安倍政権になってからはねもう何もやらないって何か方針があるような気がして

青木： 逆に言うと何で今度ね間もなく多分やるはずなんですけど。
河井夫妻を、

海渡： それはやっぱりあの体制のもとで検察の内部でちゃんとやらなければっていう人たちの勢力が少し増したんじゃないですか。

青木： 海渡さんやっぱり純粋ですね、僕なんかはですかねもっと意地悪に見るんですよ。僕は政権が弱ってるなと思ってるっていうのが一つ。それからあまりにもやらないと、検察としても今度批判が政権じゃなくて検察に行きかねないって打算、かつ河井夫妻があまりにもひどいと。

海渡： 証拠がとれたんでしょうね。

青木： そうそうそうだから、そういう意味では僕は検察ってのも先ほど言った松尾さんが言ったみたいに、しょせん行政機関の一翼で世論や政権の意向を見ながら動くので結局はやっぱり権力ってのはできるだけ1ヶ所に集中させないで分散させて相互に監視させておいたらおかないと、やっぱりヤバいよねというくらいで。

海渡： 確かにアメリカの場合なんかはその州警察と FBI とそして CIA もあってそれぞれ喧嘩してるっていうのは悪いことじゃないかもしれませんね。

青木： それでいうところが今回僕、もう少し経ったら多分議論したといけないと思ってるのは指揮権がタブーになってるでしょ。

造船疑獄の時に佐藤栄作を捕まえようとした検察に犬飼法務大臣が指揮権発動して

海渡： 佐藤藤佐っていいます。

青木： そう佐藤検事総長でタブーだったじゃないですかもうすごい批判されてるんで、当時の吉田政権が倒れたわけですよ。

指揮権っていうのが事実上はタブーになっちゃって今回安倍政権がもう無茶なこともいいことに警察トップ人事に突っ込んで行ってこれ

海渡： 指揮権発動永続化体制みたいな感じですよ。

青木： だから、検察トップ人事も指揮権もタブーになっちゃったっていうふうにしたら、僕は逆の意味で安倍政権の罪が重いと思うんだけど。例えばですよ、韓国なんかではそういう議論があるんですけど。検察トップの任命権は、政権にあって内閣にあってから非常に任命権があって、今の警察ってのは例えば取調べのあり方あるいはなんていうかな、人質司法とたくさん問題があるので、例えば、検事総長を 1 回例えば海渡さんのように民間から選んでいいじゃないかっていう議論だったら十分ありえるでしょう。

海渡： なるほど革命的な議論だね。

青木： これによって、多分タブーになっちゃいましたよね。だからこれは僕ちょっと問題じゃないかな。だから今回だって、裏では海渡さんに聞いていると思いますけど。黒川を辞めさせるなっていうふうに去年の 11 月に。黒川さん本当は今年 2 月に定年退職する予定で行く法律事務所も決まってそれで送別会まで準備されたのに。その人事を 11 月に法務省が官邸にもっていったら駄目だと。黒川は必要な人材じゃないかって言われて法務省は頭抱えちゃって、そのときに考えたのは 1、稲田検事総長を辞めてもらう。2 が今回の定年延長。3 が一回黒川さんが辞めてその弁護士になって 8 月にもう 1 回検事総長にすればいいじゃないかっていうこの 3 つあった、あったらしいんですよ。

海渡： 3 つ目は知らなかったんですよ。

青木： 1は稲田さんが辞めるはお辞めにならないので、消えちゃって。

海渡： そこは稲田さん評価してるんですよ、あそこで辞めていたら問題にならなかったんで。

青木： そうですね。2か3でしょ。3にしようかと思ったんだけど、これはまずいと。なぜなら、1回弁護士になって総長にしたら、

海渡： 変な前例を作っちゃう。

青木： 民間からなれるんだと弁護士からでも総長になれるんだっていうふうにしちゃうのは、これまずいっていうふうに法務省が判断して、それであんな無理やりな定年延長になっちゃったんですよ、やっちゃったっていうかしちゃうだろうけど、それをその都度

海渡： その三つ目の選択肢っての僕は知りませんでした。

青木： だから本当は民間から本当に検察の問題点ってのはたくさんあってこれだけえん罪も作られてるしということを考えればこれ慎重にしちゃいけないのは、多分与党だけで強行するとかよくなって、国会で本当に議論をして、与野党ある程度合意できたところでやるような方向じゃないとまずいと思うんですけど、そういうのもあり得ると思うんですよ。しかし、今回も完全にも検察って。

海渡： 聖域みたいになっちゃって。いやそうかな。でも僕はこれからやっぱ検察のトップをやる人はものすごく厳しい責務を負ったっていうそういう面もあると思うんですよ。本当に公正にやっているかどうかっていうことをね国民全員が全体を監視するような状態になったとも言えると思いますよ。

青木： そうですね。ただ、これはさっきの今日の本題に話を戻すと検察もそうですし、それから警察もそうなんですけれど、そのある意味で例えば軍事組織みたいな物理的暴力ってのは警察は一部持ってますけれども、ちょっと違うんだけれど、やっぱりね、海渡さんを前に申し上げるものもなんなんですよけど公訴権を独占してて独自捜査権まで持ってるっていうすごい権力機関として警察もそうですよね。というのはやっぱりある程度ちゃんと政治が、あるいは市民社会が干渉してコントロールしておかないとやっぱり、とてつもなく制御が利かなくなりかねない、

海渡：　そういう意味ではね、検察部の不起訴にした事例に対する市民的なコントロールっていうのは、検察審査会でね、これを僕は批判されることもあるけれどもね僕はちゃんと機能してるし、

青木：機能してますか？今だって伊藤詩織さんの件なんかどうですか？

海渡：　いやだからたまには機能することがあるという意味で言ってるのだけど僕がその自分で担当した事件で、まさにね、その東電の事件でさ、強制起訴まで行ったんですよ。あれ11人のうち8人が賛成しなきゃいけない。単純多数決じゃないんだから、裁判員の評決より厳しい条件を2回クリアしなければいけない、でもそういうことがたまに起きるでしょう。

だからそして実際の裁判が開かれて今まで隠されていたような証拠が明るみになってくるっていうね、最後にはそういうことが起こりうるっていう。

僕は実は日航機のねジャンボ機の事件のときの被害者側の刑事告訴もやったんですよ。あのときも、その検察審査会に申し立てをして不起訴不当になったんですよ。

けれどもそれは当時は強制起訴制度がなかったから、そこで終わりになっちゃったんだよ。結構長い話になりそうですね。

ちょっと面白い話になってきましたが、そろそろまとめないんですが、質問がちょっとどうでしょうか。

係：　感想が出てますけれども、

海渡：　ちょっと読んでみて、せっかくだから。

なんかどこに出てくるだろう。僕も何でてこないんだけど。お願いします。

係：　チャットで出てるのをちょっと紹介しますね。たまたま見えていますってツイートしちゃいましたね。2番目ビッグ対談。共謀じゃないかっていうそもそも、そもそも忖度に代表されるように日本では三権分立が形骸化して、国民も監視されるようであれば軍事国家になってしまうんです。

海渡：だからそうですね。あとコロナなんかもやっぱり出てきましたね。

監視社会になることだけは阻止しないといけないと思います。その通りですね、

係：感染経路はわかるのも本来こわいことであると。

海渡：　ここはどうでしょうね。僕はその実際に感染した人がねどこに感染させた可能性があるのかということに絞った情報を集めてその人たちに知らせるっていうところまでは認めていいような気がするんだけどな。

青木：　それもあれじゃないですか。そのデータに何を紐付けるかですよ。例えば極端なこと言えば別に名前だって必要ないわけで名前も必要ないし、だからこのスマホの電話番号だって下手したら必要ないわけでしょう。だからできるだけ制約されたそういう形で何かできるだけ制約されたような形での情報提供であるんだったら、それはもう僕はあり得ると思うし、そんなに止められないでしょうきっとね。

ただ、さっき言ったように、どういう情報を誰がどのように使うかということを中心に歯どめをかけた上で、外部からそれなりの透明性でチェックできるようであれば、それはいろんな方法が多分考えられるんじゃないですかね。

海渡：　そうですね。

あとやっぱ検察庁法のところで結構書かれてるけども、検察庁法の改正案はツイッターデモやって成功したけどスーパーシティ法だとツイッターデモで消されたってなってますけど、それトレンドで上がったんですよ。ちゃんと上がったけども検察庁法の改正案のときは100万200万になったんだけど、そこまでいなくて10万ぐらいだったね

青木：　スーパーシティ法案はこれは僕らの自己反省も含めて言うと、メディアも反応が鈍かったですよね。僕もラジオ番組でやらなくちゃならなくちゃと思ってて検察庁法改定案は何回もやって、種苗法も1回か2回やったんだけどスーパーシティ法案まで間に合わなくて、やらなかったからあんまりやらなかったんだから問題だらけのこといっぱいありますね。

海渡：　終わったあとにね、東京新聞の特報面になんか大きく取り上げてくれたんで、そういう意味では終わってからもいいからあの実は問題として終わってないんですよ。

これから各自治体で手をあげて、そこを審査していくというような話だから息の長い取り組みが必要なテーマだろうと思いますけどね。

なぜか言葉と音声はずれてますっていうんで書いてあるけど、

係：　それはそんなことないと思います。各受け取る人の機械によるんじゃないかなあ。

海渡：　だいたいそんなところですけど、あのせっかくだから瀬瀬さん感想でも質問とかあったら言ってください。

瀬瀬： ついつい聞き入ってしまいまして、自分の中でまとめるっていうこととかこういうことを聞きたいっていうのはその時々で何か疑問に思ったことはあったんですけど、ただその感想としてちょっと述べさせていただきますと、ついつい、この政権下で起こってることをが次々思いもしないこともあって、何でこんなことが次々起こって許されていくんだらうっていう市民活動している人間としては非常につらいというか、やっけていて徒労感があるようなことが多いんですけど。でも今日の2人の話を聞きながらやはり諦めちゃいけないっていうのと、例えば何か成立したとしても、そこからの運動っていうのは非常に重要で、それを例えば監視していくとか、止めていくとか、共謀罪法でいけばそれを適用させないっていう取り組みは、

海渡： 廃止運動続けてることがね、共謀罪のね実際の実施例がないっていうことと関連があると思いますね。何もなかったらねを堂々とやると思う。やっぱり破防法だって反対運動が強かったっていうことの記憶があるからね、その直接団体適用ということはもう非常にハードルが高くできないわけですよ。だから共謀罪もあれだけの反対運動が一応あったっていうねそして廃止運動の今も続いているっていうことが僕はその適応に歯止めをかけてると信じてるんですけどね。

瀬瀬： そう思いました。ありがとうございました。

海渡： せっかくなので最後まとめに少しずつ話しましょう。これは最後に青木さんに話してもらうことにして、僕がちょっと一言いいですか。さっきもちょっとお話ししましたけれどもこの監視社会の問題っていうのは非常に難しいなってか、一般の人たちもより安全な社会安心な社会が欲しいって自分は何も悪いことしてないから、あの監視されても平気だわみたいなことを平気で言う人がいるんですよ。でもどうもこのこういう言葉遣いってのは何かナチスドイツのときに始まったらしいですね。そういう深いあの過去がある言説らしいですけども、やっぱり僕は監視されている状態の中ではですね、人間はまともに考えをまとめることができなくなると思うんですよ。その発言できなくなるより前にね、まともに物事が考えられなくなってしまってそしてその無力化されてしまう。だからやっぱり人間が人間であり続けてちゃんと発信できる主体として存在するためにはプライバシーっていうのはどうしても必要でスノーデンさんもそのことをすごく強く書かれていて僕はあの本はとってもいい本だなと思ったんですけども。やっぱり今、例えば香港香港でですね国家安全法に反対しているアグネスさんですかああい人たちの苦悩とか思うと胸が詰まっちゃうんですけども。やっぱり人間が人間であり続けるためには監視してはならないっていう部分があるんだと。そしてそこをきちっと守らなければいけない。だけれども、例えばコロナに感染した人を特定して、ちゃんと検査するためにそのそういう進んだ技術を使う。しかしそこで問題が起きないようにしながら使う。そういうことが何とかできないかなと。

そのためにはやっぱり僕はヨーロッパを礼賛するんじゃないんですけれども、ヨーロッパいろんなことを考えてきてやっぱり一番問題が起きないように形にして、個人情報も守りながら、しかしとそういう利便性も追求するっていうなんとかバランスをとろうというふうにしてるんだらうと思うんですよ。そういうもっともっと勉強して、監視社会の中で市民の活動が続けていけるようになればいいなと思ってこういう活動に取り組んでいます。今日は本当にお忙しい中を青木さんに来ていただいて、最後に一言言ってくださいということでぜひお願いします。

青木： 一言。でもこの前、海渡さんおっしゃった話されればよかったのに。

海渡： なんですか？

青木： 私は安心安全のためには多少のプライバシーを侵害されても仕方ないっていう人には、じゃああなたメールとパソコンのパスワードをですわね

海渡： そうそうそれ僕よくいうんですわね。誰一人いいって言う人はいないですよわね

青木： だから僕もそう思います。さっき言ったようにね、犯罪殺人は許せないんだという犯罪は許せないんだ。人を殺したら死刑は当然だみたいなこと言ってる人には不幸にも、今、日本に年間1000件くらいまだ殺人事件があって半分以上が家族内殺人だったら、全ての家の全ての部屋に監視カメラをつけなさいと。そうすれば、すぐ犯人は逮捕。そうそうっていう社会って嫌ですよわねと。

だからあなたのパスワードを教えてください。あなたにもそれぞれプライバシーはあるでしょうと、僕も最近ほぼプライバシーないんですけど。生きづらい世の中ですけど、せめて国家に監視されて全てを握られることの怖さみたいなのがね前川さんなんかのケースで言えばわかると思うし、一番怖いのは私は究極的に言うと、監視国家って警察国家なんですよわね。だからさっき言ったように、安倍さんっていうのは本当に能天気な人だなと思うんだけど、これだけ治安機関だったりとかっていうものにましてや今みたいにデジタルデバイスが発達してきて、おそらくやろうと思えば相当のことができちゃうようなときにそういう権限とかを与えたら、あなただって下手するとやられるんだよ、そういうことをちょっと想像力っていうか、こう及ばない、

海渡： 昔は自民党の議員もやっぱ、選挙違反のときにひどい目にあった警察に対する警戒心がある政治家が多かったんですよわね。

青木： だから今日話しに出したことが後藤田正晴さんの有名な言葉があつてね。

僕は情報機関というのが必要だなんて思わないんだけど、でも後藤田さんは亡くなる何年前なんでしょうね朝日新聞のインタビューで、記者にね、後藤田さんは情報機関は必要だと思いますかって聞かれて後藤田さんの答えがなかなか奮ってて私は日本は平和国家としてやっていく上で、うさぎの長い耳、つまり情報機関は必要だと思うと、ただしこれはきちんと政治や社会がコントロールしないととんでもない化け物になりかねないので、今の日本にそんな力があるかっていうことを考えると僕なんかは迷っちゃうんだよねっていうふうに後藤田さんは言ってたんですよね。これって本当かつてのいま海渡さんが言ったみたいに、かつての自民党だったり、かつての保守だったり、かつての警察官僚っていう人たちは少なくとも、実は本気でどこまで思っていたかは別として、メディアのインタビューでそういう感覚を。

海渡： 権力の行使に当たっての何か自制心、

青木： 自制心そうですね。それからそれから権力ってというのがどういうものなのかって

海渡：ほんとそうですね、ちょっと話続けちゃうとね、検察庁法のことが問題になったときにね僕思ったんですけどね、その検察のトップ人事に手をつけないってというのはこれは今までの自民党政権の政権運営のイロハだったと思うんですよ。

そのことを知ってる人が政権の中枢に居なくなったんだと思うんですよ。

そういうことをやっちゃいけないことだしね、それをそれをやったら石破さんなんかこれやっちゃいけないことだって言いましたよね。

だからこそ、そういう意味で彼は本当にあの古い今までの自民党の伝統を引きついでる政治家なんだろうと思うんだけど、今の安倍政権を支えている中枢になっている人たちは知ってる人もいたかもしれないけどもその時代が変わったんだとそういうことをやるんだっていうふうにきつと思ったんだと思うんですよ。そこに僕は今日本の自公政権が恐ろしいところにまで走って行ってしまってるなって感じましたけどね。

青木： それでいうとだからね、いろんなところで言われてますけど、それは法制局の長官もそうだし、それから日銀の総裁もそうだし、NHKの会長もそうだし、国税庁の長官もそうだし、最高裁の判事だって、

海渡： そうですね。手をつけちゃいけないところに次々に手をつけてきちゃいましたね。

青木： つまり権力を鞘に納めておかないといけない権力を抜き身にしてブンブン振り回すっていう最後はね検察庁法改定案と、黒川さんってのは自分でずっこけたんだけど、そういう公権力ってものがそれに無自覚なんですよ。つまりはですね、安倍さんってのは安

倍さんの生い立ちなんかも取材したんだけど基本的に単なるボンボンなので、例えば国会の場で自分が森友学園問題で私や妻が関与したら私は議員辞めるって言ったら何が起きるかっていうことを多分想像できないんですよ。だから何ていうかああいう改ざんも来たし自殺も起きちゃったし。だから、そういう意味では、結構チャイルディッシュな政権だなんていうふうに思いますね。

海渡： それはやっぱりその警察官僚とかを中心とするね、官邸中枢のああいう人たちが必死で支えてるところが怖いです。

青木： けどもう終わりでしょう。

海渡： そうですか。

青木： そりゃそうでしょ。だってあんなに危機管理、危機管理って言ってたのに、コロナでこんなポンコツぶりをさらけ出して何の役にも立たないじゃないかな。挙句の果てに、だって僕はこの海渡さんたちがもっと言ってほしいんですけどだって憲法改正で衆議院の任期切れて有事になったらどうするんですかって改定しようとしてるのに、17日に国会を閉じるのってお前馬鹿じゃないかという話でしょ。

今有事で国会開かなくちゃいけなくて衆議院の任期まだ来てないのに何で国会を閉じるんだって、

海渡： これは絶対おそらく野党がですね、4分の1以上をってるわけだから国会直ちに開けていうね、そういうキャンペーンをするべきですよ、

青木： やるべきだと思います。

海渡： 国会を開けてっていうキャンペーンはできるんですから、その申請もできるんですからね。そのときに開かなければね、それこそねあーもう1回1000万人のツイートデモやるしかないです。

青木： 終わりですよ。終わらなきゃもうこの国は終わりです。本当。

海渡： ちようどうまく終わったようでございます。はい最後締めてください。

瀬瀬： 今日はお忙しい中、青木さん本当にありがとうございました。海渡さんありがとうございました。お疲れ様でした。

それではですね最後にちょっと宣伝させてください。

この本ですねはいこちらですね、『知らないうちに見られている。これ1冊でわかる監視社会』というブックレットを出しました。

これ非常に好評で今売れてるんですけども、海渡さんも書いてらっしゃいます。

海渡：今お話したようなことも書いてあります。

瀬瀬：今ここから海渡さん拾っていくつかお話されておりましたけれども、1冊300円で売っておりますが、10冊以上を買っていただくと1冊150円という半額になります。かなりサービスをしておりますのでぜひこれをですね、あの仲間の皆さん、ご家族とかお友達とか、あの地域の仲間の人たちと買っていただいてぜひやっぱり勉強していただきたいと思います。ぜひ監視社会なんていうものは本当にいらぬという声をですね、もっともっと盛り上げていきたいと思っておりますのでこれからもよろしく願います。今日は本当にありがとうございました。